

見ると、(この測定は、地図で見るとほぼ河辺村の中心と思われる大伍小学校の観測である。海拔高度二八〇m)年平均気温が一三度で、一月は平均四度、七月が二六・一度となっている。雨量についてみると、五・六・七・八月と次第に増加しており、冬季の降雨は雪になりやすい(図1-5)。

このように夏には、かなり高温となる一方、一月には最低マインス六度、二月には最低七度の日がみられる。

前記の降水量を過去にみると、河辺村では内陸部特有の少雨ではなく、かなり多い。昭和四四年には、一・六八二ミリ・同四五年には、一・九〇六ミリ・同四九年には、一・七七三ミリとなっている。これは夏季太平洋沿岸大雨地帯の降雨の越境の影響であると思われる。従って河辺村の気候を一口に言えば、夏季太平洋沿岸大雨地帯の越境の影響をもつ、内陸盆地型気候といえるだろう。しかし、北平日其川のように海拔高度が七〇〇mの所では、久万高原型に近く、冬季の冷え込みは厳しく、積雪も多い。

V字型峡谷型の河川に沿った居住地区は、地形的に通風性が悪く、夏には気温の上昇とともに、かなり蒸し暑い。しかし、夜間ともなれば、山間峡谷特有の冷気が漂い、しのぎやすくなる。秋の末から気温の下降とともに、河川に沿った居住地では日照時間が短くなり、現河辺中学校では、冬季には午前十一時ころにならなければ、グラウンドに日が射さないし、日没も、

また早い。

## 二 自然災害

### 河辺村の天災

河辺村の災害については、大体において台風などによる農林業被害が中心で、住宅などに及ぼす被害は、他町村に比して少ないようである。昭和四六年、台風一九号により死者一名を出しているほか、昭和五七年八月台風一三号による激じん災害地域指定を受けている。この時、八月二六日一〇時から翌二七日一〇時まで、最大雨量二五二・五ミリを計測した。

河辺村で特徴的な自然災害といえば、夏季洪水期のがけ崩れによる農地、道路の決壊がある。

### 河辺村の地すべり地帯

建設省大洲工事事務所発刊の記録によると、「昭和一八年七月二四日には低気圧、不連続線による死傷者一三一人・流失家屋五五四戸・全壊家屋三九六戸・田畑流失埋没一、六七六・七町歩」とあり、「昭和二〇年九月一八日には枕崎台風による死傷者一五二人・流失家屋三八八戸・全壊家屋一、六三四戸・田畑流失埋没六九七・四町歩」等とある。

昭和一八年のは、長雨と集中豪雨による被害であり、当時の  
 脇川村としての被害程度は、鹿野川の町筋が浸水する程の出水  
 ではなかった。

昭和二〇年九月には雨量も多く(五二四ミリ)、降雨時間も、  
 まる二日間だったので、地盤の水気も飽和状態となつて、各所  
 で崩壊があつた。昭和一八年も雨量は五八〇ミリで各所に地す  
 べりを起こしたが、現河辺村地域では、大字山鳥坂・下大成の  
 赤土一帯で、約三m地盤降下・幅二〇〇m、大字植松・松ノ久  
 保で、降下二m・幅八〇m、同日ノ平で幅八〇mほどの崩壊、  
 大字宮谷・上川崎で幅五〇mの崩壊、大字北平・竹ノ瀬で降下  
 一m・幅八〇m、同天神で降下亀裂一m・一・五m・幅一〇〇  
 mにわたつての、地すべりが  
 あつた。(河辺村防災基本計画  
 書より)

また、大字北平・国木部落  
 で地すべりが生じたし、大字  
 植松・橋詰部落は地盤調査の  
 結果、地すべり地帯に指定さ  
 れている。

こうしてみると、目を見た  
 河辺村は、至る所の急傾斜面  
 に岩石が露出していて、地盤



地すべり指定地 日ノ平地区

は強固のように一見、見受けられるが、地質地盤調査の行われ  
 ていない現状では、計り知れないけれども、地盤は案外、ぜい  
 弱な箇所が多いことがわかる。

#### 台風と農作物の災害

本村での台風の被害は、明治一九年の大暴風雨、昭和二〇年  
 の台風及び大洪水、昭和三六年の室戸台風等があつた。

これらの被害が本村で大きかつた理由として、一つには本村  
 の溪谷が東西に走つていて、直接的には東南風が通路化するこ  
 とと、さらにV字型谷形であることである。V字型谷形の場合  
 は、山下ろし風がひどくなつて、被害が増大する。

部落としては、宮谷・川上・国木等が従来の経験からは被害  
 が大きい、とは、農業共済事務者の言である。

昭和二〇年の場合は、植松部落で二戸全壊したが、これは、  
 ゲジノ尾山よりの下ろし風が当たつたと言われる。こうした部  
 落や家には、古来、防風林があつたようで、現在も残つている  
 ものに、元天神社の境内木(元役場付近の巨木)、富永政男氏宅・  
 橋詰の子供の遊び場の古木等がある。

その他の家にも後ろ山に古木があつて、防風の役割を果たし  
 ていたようである。数十年に一回の備えとして、個人あるいは  
 部落としての防風林、防風樹垣等は、本村の地形上から見直す  
 べき存在である。

#### 災害予防計画

平成に入ってから日本は特に大きな災害に見舞われた。まず、  
 平成二年一月雲仙普賢岳噴火による火砕流発生で、死者行方  
 不明四人・一七九棟焼失倒壊。次いで平成七年一月一七日、  
 阪神淡路大震災が起こり、死者六、四三二人・負傷者四三、七  
 九二人・家屋倒壊二四九、一八〇棟という未曾有の被害を記録  
 した。また平成二二年六月からの三宅島の火山噴火活動では全  
 島民、島外での避難生活を余儀  
 なくされ、現在(平成一六年四  
 月)もなお続いている。平成一  
 三年三月には瀬戸内芸予地震は  
 死者二人・負傷者二八七人、愛  
 媛県も大きな被害に遭つた。

われわれは、自然の前にはい  
 かに無力であるかということ  
 を思い知らされた。特に阪神淡路  
 大地震から、防災意識が高まっ  
 ていった。それまで大都市や地  
 方でも防災計画が立てられてい  
 たが、実際の災害を想定して、  
 具体的な見直しが図られた。事

表1-8 地すべり指定地(農林省)

地区名	指定年	指定地場所	面積(ha)	被害予想耕地面積(ha)
日の平	S45	植松	52.3	10.2
椽谷	S46	植松	62.3	24.5
大成	S46	山鳥坂	57.1	18.1
宮谷	S47	川崎	57.2	13.3
上大成	S61	山鳥坂	22.4	5.0

表1-9 地すべり危険箇所

区域名	河川名			危険区域の現況				被害 予想 戸数 (戸)	被害 予想 耕地 面積 (ha)
	水系名	幹線名	溪流名	位置	面積 (ha)	勾配 (度)	地質		
寺藪	脇川	河辺川	河辺川	河都	6.7	38	輝緑凝灰岩	15	6.0
竹の成	〃	〃	キビシ川	横山	12.5	31	緑色片岩	24	11.0
日除	〃	〃	キビシ川	川崎	16.6	31	〃	31	32.0
日其川	〃	〃	河辺川	北平	6.1	28	〃	16	0.2
竹の瀬	〃	〃	河辺川	三嶋	15.6	32	〃	19	0.2
神納	〃	〃	河辺川	北平	3.4	40	〃	26	0.1